

第2章 銃後

子どもたちの生活①【北海道・札幌】

戦時中の子どもたちの生活

稲田亮一さんのお話から

終戦を迎えた昭和二十年（一九四五年）八月十五日。私は苗穂国民学校（今の苗穂小学校）の小学校四年生でした。

当時の学校では、「軍国教育」といって戦争に勝つための教育が行われていました。例えば、国語では、教科書に出てくる物語文や説明文が戦争に関わるお話になっていて、軍馬を飼っている少年のお話や軍用犬についてのお話、点火した爆弾を三人で持って、敵軍に突っ込んでいった勇敢な「爆弾三勇士（肉弾三勇士）」のお話などがありました。体育では、銃剣で相手を突く訓練をしたり、寒い時に上半身裸になって、手ぬぐいで皮ふをこすって丈夫にする乾布摩擦をしたりしました。その他にも、敵であるアメリカとイギリスの人は、人間ではない、鬼やけものという意味の「鬼畜米英」という言葉を習い、万が一相手に捕まったら、死んだ方がいいと教わりました。

○ホップ クワ科の多年生のつる草。全長5mぐらいで、果実はまつかさの形。ビールの原料で、ビールの苦味や香りの源。北海道開拓使の雇い外国人であるトーマス・アンチセルが北海道岩内町で自生しているホップを発見したことをきっかけに、ビールの生産とホップの栽培が始まった。

「勤労奉仕」というものもあって、学校で学習するだけでなく、働きに出ることもありました。私は苗穂にいたので、四年生からサツポロビール園のホップ摘みの仕事をしていました。上級生は古谷製菓のキャラメル工場に行ったり、中学生は丘珠飛行場に行つて木製（ベニヤ）のおどりの飛行機を作ったりしていました。「援農」といって農家に手伝いに行く人もいました。戦争が激しさを増していくにつれて、物不足が深刻になりました。紙が不足し、教科書は上級生からのお下がりになりました。ノートも新しいものはないので、消しゴムで古い文字を消しては、新しく書きこんだりしていました。習字の半紙もなくなり、同じ紙の上で何度も書い

○すいとん 小麦粉を水で練って作った団子。
○非国民 当時の日本では、戦争に協力しない者や戦争に反対していると見なされた者を、国民としての義務を守らない者、国家を裏切ぎるような行為をする者として、非国民と呼び非難した。

て、紙自体が真っ黒になるまで使って勉強していました。

戦時中、学校給食はなく、お弁当を持ってくることになっていました。当時の主食はお米ではなく芋やかぼちゃでした。今でも一食ぐらいならおいしく食べられるかもしれませんが、毎日三食全部が芋とかぼちゃです。食料不足なのに、食べあきてしまつて大変でした。私は手が黄色に変色するくらいかぼちやを食べました。時には、雑炊やすいとんを食べることもありましたが、お金持ちの家では、お米がある家もありました。ただ、お昼のお弁当となると自分だけお米を食べていると「非国民」とみんなから言わ



イメージ図

○防空壕 航空機による空からの攻撃から身を守るためにつくった穴や地下室。

○玉音放送 天皇自身の肉声による放送。特に終戦を伝えるラジオ放送を指すことが多い。

北海道にも敵機が頻繁に来るようになり、根室や釧路、室蘭などでは敵の攻撃で大きな被害が出ました。札幌にも空襲があり、死者が出たという話を聞きました。授業中に空襲警報のサイレンが鳴ることが多くなり、鳴っては机の下や防空壕に入り、解除のサイレンが鳴っては、また授業に戻るといふことの繰り返しで、勉強になりませんでした。家でも空襲への備えを進め、防空壕を作って、人が入れるスペースを確保したり、中に布団や食料、日用品を準備したりしました。

そして、昭和二十年八月十五日、天皇陛下による玉音放送がありました。その放送により、日本は戦争に敗れ、無条件降伏を受け入れたことを知りました。私はそれを聞いてほっとしました。自分もいつか兵隊として戦地に行き、死ぬのだろうと思っていたからです。行けば死ぬとわかっていながら、行くのはとても辛いことでした。兵隊になりたくないとも言えず、仕方なく大人や先生に兵隊になりたいと言っていたから、これで助かったと感じました。

日本は、戦争で多くの犠牲を出し、多くのものを失いました。しかし、そこから戦後の歩みを経て、今の平和を築き上げてきたのです。みなさんも大人になったら、戦争のない平和な国を作っていくように、力を合わせて頑張ってください。

DATA

平成20年度東区平和事業
聴き取り
・平成20年12月24日
・明園小学校



稲田亮一(いなだ・りょういち)さん
・昭和11年(1936年)生まれ
・札幌市東区在住